

九州大学の「教育の質」確保のための入口調査について

— 高校別の九州大学合格者の動向分析を中心に —

Entrance Survey for quality assurance of education of Kyushu University

大学評価情報室 高田 英一

Institutional Research Office Eiichi Takata

キーワード：教育の質 (quality of education), 大学入試 (university entrance examination), アドミッション・ポリシー (admission policy)

1. はじめに

現在、大学では、全入時代の到来とそれに伴う学力低下へ対応するための「教育の質」の確保が大きな課題となっている。この「教育の質」を確保するためには、アドミッション・ポリシー、カリキュラムポリシー、ディプロマポリシーに基づいた、「入口」から「出口」までの一貫した教育への取組が不可欠である。

この点、九州大学の「入口」である入学者選抜試験（学士課程）に関するデータを見ると、志願倍率は3倍以上、入学定員充足率も100%以上を維持しており、一見問題ないように見える。しかし、これらのデータは、いずれも量的なデータであり、質の面については必ずしも反映されていない。また、いくつかの現場からは入学者の質の低下を嘆く声も聞かれるところである。

このため、本稿においては、出身高校別の九州大学合格者の動向に着目・分析することで、本大学の入学者選抜試験に関する課題、ひいては、九州大学の教育の質の確保に関する課題を探ることとする。

(表1) 九州大学の出身高校所在県別入学状況
〔九州大学概要〕より作成) (%)

2. 分析対象及び分析の視点について

(1) 九州大学の学生の主な出身地

過去3年(2006~2008年)の九州大学の入学者の出身高校所在県(表1)を見ると、入学者の8割近くが九州地域の出身である。また、中国地方が増加傾向にある。

このため、本稿での分析対象とする高校は、九州・沖縄地域の高校、及び、中国地方の中で最も関係の深いと思われる山口県の高校とする。

	2006年	2007年	2008年
福岡県	44.5	42.5	42.1
佐賀県	6.2	5.6	5.3
長崎県	7.4	7.3	8.0
熊本県	5.3	5.5	6.3
大分県	4.6	4.3	4.3
宮崎県	3.9	4.0	3.6
鹿児島県	7.0	6.3	6.6
沖縄県	0.7	0.9	0.7
(九州・沖縄地域合計)	79.6	76.4	76.9
関西地方	2.2	3.3	2.8
中国地方	9.7	12.3	12.1

(2) 分析対象とする高校について

実際には、九州・沖縄地域及び山口県の全ての高校を分析対象とすることはできない。

そのため、本稿の分析対象とする高校は、過去5年間（2004～2008年）に、九州大学へ3人以上合格者（1年度当たり）を1回（1年度）以上出した高校に限定した。また、対象とした高校を、過去5年間の平均合格者数によって5つのグループに分類した（表2参照）。なお、高校ごとの学力水準の変動については、把握が困難であり、今回の分析では、把握できていないことを申し上げておく。

（表2）分析対象とする高校について

	九州大学への平均合格者数	該当校数（公立・私立の別）	平均卒業生数
第1グループ	100人以上	3校（公立3校・私立0校）	400.2人
第2グループ	30人以上99人以下	13校（公立10校・私立3校）	387.8人
第3グループ	10人以上29人以下	38校（公立30校・私立8校）	343.2人
第4グループ	5人以上9人以下	33校（公立24校・私立9校）	302.1人
第5グループ	4人以下	53校（公立32校・私立21校）	297.1人
総計		140校（公立99校・私立41校）	

(3) 使用するデータについて

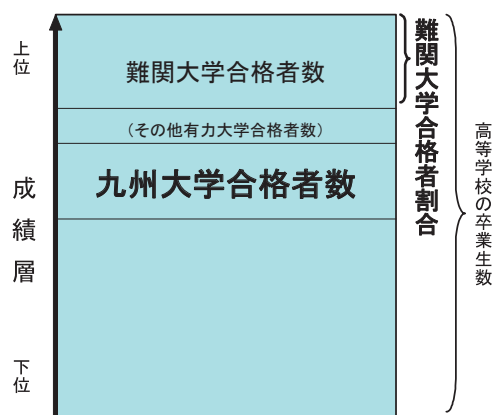
本稿では、毎日新聞社発行「サンデー毎日」誌の大学入試特集号（2004～2008年度）に掲載された高校ごとの個別大学の合格者数のデータを用いた。同誌のデータは、必ずしもすべての合格者を把握したものではないと思われるが、出身高校ごとの大学合格者数を一覧の形式で継続して公表している数少ない資料であるため、用いた。なお、同データには、高校（宮崎大宮など）によっては、データが欠けている年度もあるが、その場合は、便宜上、合格者数0として扱った。

(4) 分析の視点について

①本稿では、九州大学入学者の動向を量・質の両面から検討することを目的としている。このため、まず第1に、入学者の量の動向を表す代理指標として、「九州大学合格者数」を用いる。

②第2に、各高校におけるどの成績層の学生が九州大学に合格しているのか、その動向に注目する。具体的には、各高校において「九州大学よりも入試難易度が高いと思われる国立大学」（以下、「難関大学」。）に合格している学生の動向を分析する。その際、学校規模の違いによる影響を避けるため、「当該高校の各年度の卒業生総数に占める難関大学への合格者数の割合（％）」（以下、「難関大学合格者割合」。）をデータとして用いる。

③本稿では、「難関大学」として、東京大学、京都大学、



（図1）九州大学合格者数と難関大学合格割合の関係図

大阪大学を位置づけた。言うまでもないが、入試難易度は学部ごとに大きく異なっている。しかし、現状では、高校毎の学部別の合格者に関するデータを収集することは困難であるため、便宜上、大学単位で分析せざるを得ない。このため本稿での分析結果には限界があり、また、代替的なものであることを初めに申し上げておく。

④以上で述べた「九州大学合格者数」・「難関大学合格者割合」の関係は、図1に示すとおりである。

3. 九州大学への平均合格者数によるグループごとの動向について

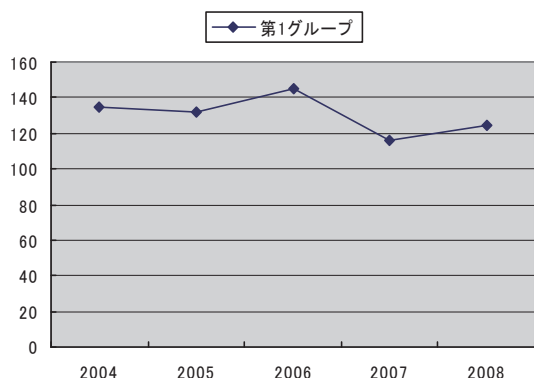
まず、上記2(2)の区分による第1～5グループごとの動向を分析する。

(1) 第1グループ（100人以上）

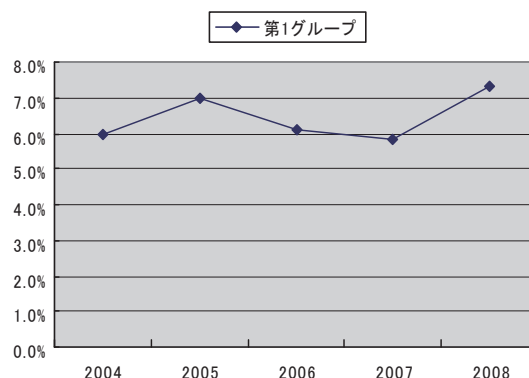
九州大学合格者数については、第1グループの高校の平均は、低下傾向（▲9.3人）にある。母数が大きいため、低下率は低いが、5グループで最も低下数が多い（表3）。

他方、難関大学合格者割合については、第1グループの高校の平均は、全体としてやや上昇傾向（△1.3%）にある（表4）。

（表3）第1グループの平均合格者数の推移



（表4）第1グループの平均難関大学合格者割合の推移



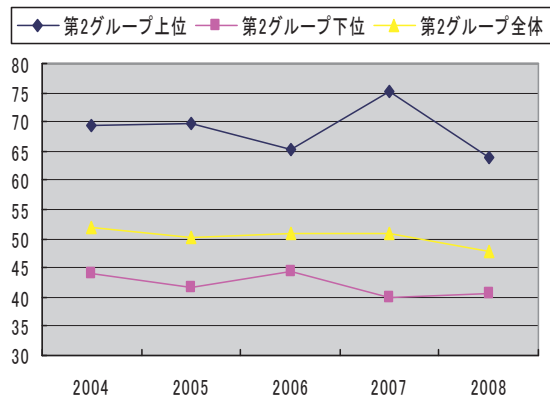
以上のように、九州大学合格者数の低下の一方で、難関大学合格者割合は上昇している。これは、従来九州大学に進学していた成績上位者層が難関大学等へ進学した結果、と推測される。これを1高校当たり（第1グループの平均卒業生数約400人、表2参照。）で見ると、従来よりも難関大学への入学者が5人以上増加している計算となる。

(2) 第2グループ

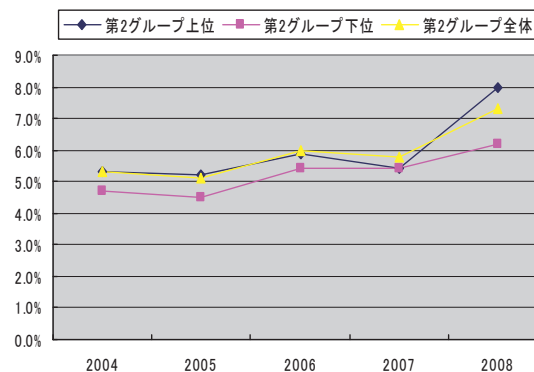
九州大学合格者数については、第2グループ全体の平均は、低下（▲4人）している。第2グループをより細かく、上位校（平均60人以上、該当校4校）・下位校（平均30人以上60人未満、該当校9校）に分けて比較すると、上位校（▲5.7人）が下位校（▲3.2人）より低下が大きい（表5）。

他方、難関大学合格者割合については、第2グループ全体の平均は、5グループ中最も大きく上昇（△2.0%）している。さらに、上位校では、より上昇傾向が強い（表6）。

(表5) 第2グループの平均合格者数の推移



(表6) 第2グループの平均難関大学合格者割合の推移

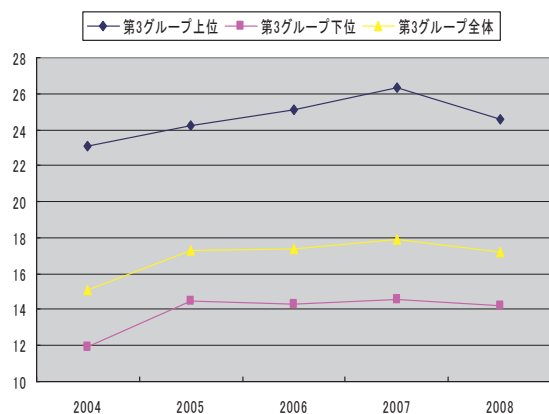


以上のとおり、第2グループには、第1グループと同様の傾向が見られるが、第2グループの難関大学への進学傾向は、5グループ中で最も強いと推測される。これを1高校当たり（第2グループの平均卒業生数約383人、表2参照。）で見ると、従来よりも難関大学への入学者が7人以上増加している計算となる。特に、第2グループの上位校でその傾向が強い。

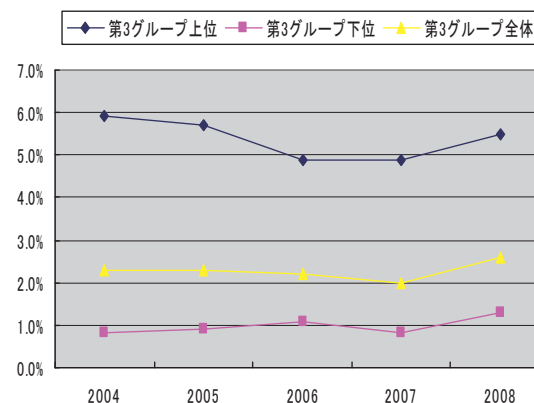
(3) 第3グループ

九州大学合格者数については、第3グループ全体の平均は、やや増加傾向にある。第3グループをより細かく、上位校（20人以上30人未満、該当校数11校）・下位校（10人以上20人未満、該当校数27校）に分けて比較すると、下位校（△2.3人）が上位校（△1.5人）より、若干上昇傾向が大きい（表7）。

(表7) 第3グループの平均合格者数の推移



(表8) 第3グループの平均難関大学合格者割合の推移



他方、難関大学合格者割合については、第3グループ全体の平均は、横ばい傾向にある。また、第3グループ上位校でやや低下傾向、下位校でやや上昇傾向にある（表8）。

九州大学合格者数の上昇の一方、難関大学合格者割合が横ばいであることから、九州大学への合格者が増加しているが、難関大学への進学傾向はあまり見られない、と推測される。

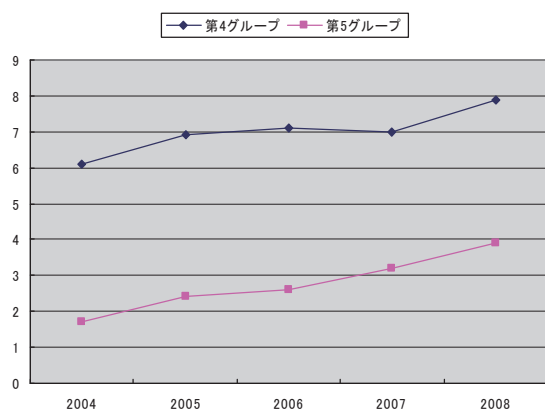
(4) 第4, 第5グループ

九州大学合格者数については、両グループとも、増加傾向にある（両グループとも△約2人）（表9）。

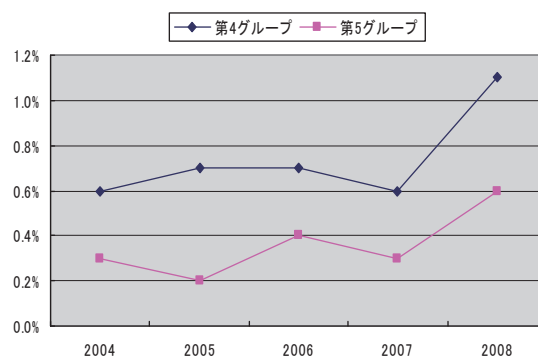
他方、難関大学合格者割合については、両グループとも、上昇傾向にある（第4グループ△0.5%、第5グループ△0.3%）（表10）。1高校当たり（両グループとも、平均卒業生数約300人、表2参照。）で見ると、1校当たりの増加人数は、第4グループ約1.5人、第5グループ約1人となる。

九州大学合格者数の上昇の一方で、難関大学合格者割合も上昇傾向にある。このことから、これらの高校の成績上位者に、九州大学合格者の増加と同時に、従来ほとんどなかった難関大学への合格者が生じている、と推測される。

(表9) 第4, 5グループの平均合格者数の推移



(表10) 第4, 5グループの平均難関大学合格者割合の推移



(5) 全体のまとめ

九州大学合格者数は、第1, 第2グループで減少の一方、下位グループで増加している。他方、難関大学合格者割合は、横ばいの第3グループを除いて、多くのグループで増加傾向にある。

これらのデータからは、上位グループでは、難関大学への進学傾向が強まっていると推測される。また、下位グループでは、九州大学とともに難関大学への進学者が増加していると推測される。

4. 県ごとの傾向について

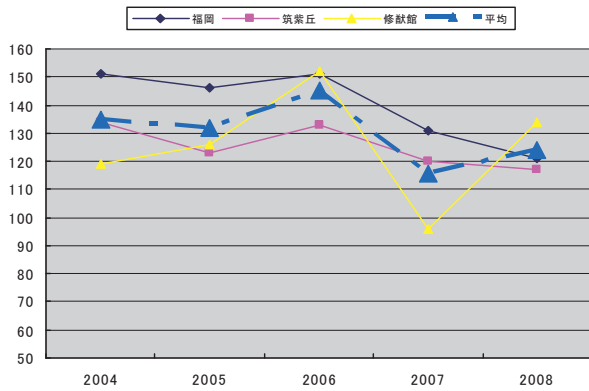
以下では、県ごとの傾向を分析する。分析の対象とする県は、九州大学入学者に占める割合の高い5県（福岡、佐賀、長崎、熊本、鹿児島）とする（表1参照）。また、過去5年間（2004～2008年）の九州大学合格者総数（10,360人）のうち、79.9%を公立高校出身者が占めている（8,282人）ことから、これらの県に所在する公立高校を分析対象とする。

なお、第5グループの高校に関しては、合格者数が少なく、また、高校ごと、年度ごとの変化が激しいことから、以下では、分析対象としないこととする。

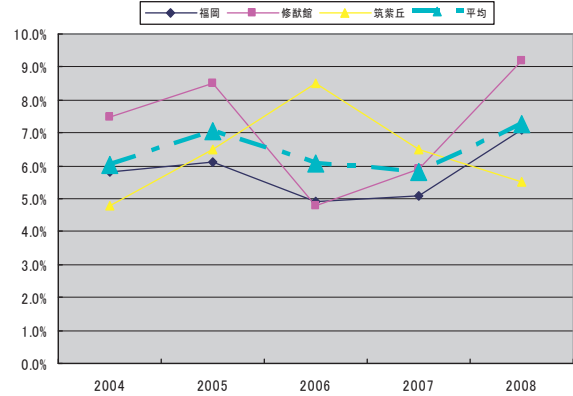
(1) 福岡県

①第1グループ

(イ) 福岡・第1グループの九州大学合格者数の推移



(ロ) 福岡・第1グループの難関大学合格者割合の推移



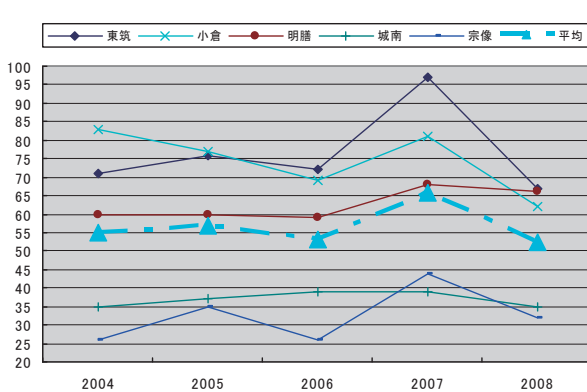
第1グループに属する高校は福岡県の高校のみである。その意味では、基盤に、強い地元志向、言い換えるならば、強い「九州大学への進学傾向」が存在している。

しかし、平均を見ると、九州大学合格者数が低下する一方で、難関大学合格者割合は上昇している。これは、高校の成績上位者層が難関大学へ進学する傾向があるため、と推測される。

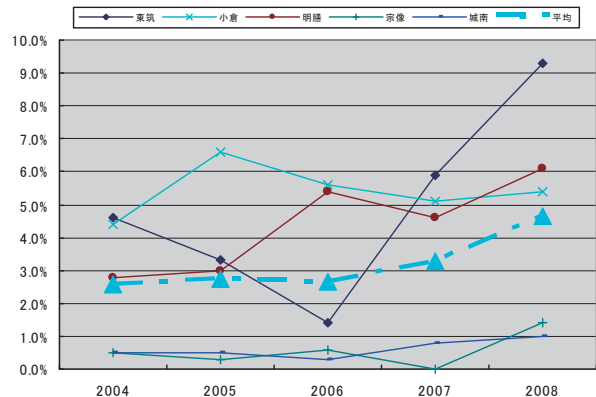
高校ごとに見ると、傾向は2つに分かれており、修猷館高校・福岡高校は九州大学合格者数は低下、難関大学合格者割合は上昇しているのに対して、筑紫丘高校は反対の傾向にある（以下、「高校」は省略する）。

②第2グループ

(イ) 福岡・第2グループの九州大学合格者数の推移



(ロ) 福岡・第2グループの難関大学合格者割合の推移

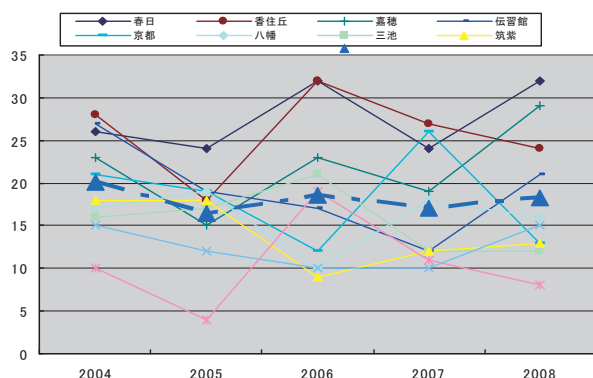


平均を見ると、第1グループと同様、九州大学合格者数が低下する一方で、難関大学合格者割合は上昇しているが、難関大学合格者割合は、第1グループよりも強い上昇傾向にある。難関大学への進学傾向が強くなっているため、と推測される。

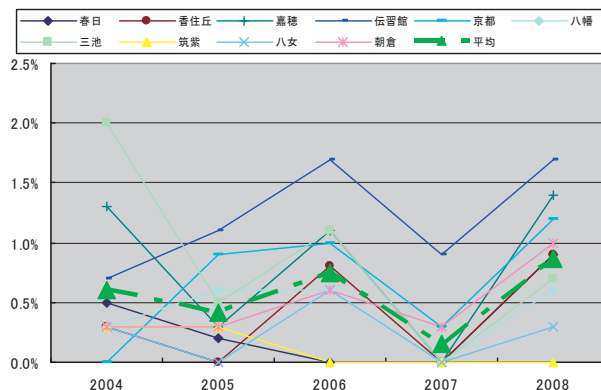
高校ごとに見ると、特に難関大学合格者割合に関して、上昇傾向の強い高校（東筑、小倉、明膳）と横ばい傾向の高校（城南、宗像）の高校に分かれる。後者は、九州大学への進学傾向の強い高校といえる。しかし、これらの高校も徐々に上昇傾向が強まってきている。

③第3グループ

(イ) 福岡・第3グループの九州大学合格者数の推移



(ロ) 福岡・第3グループの難関大学合格者割合の推移

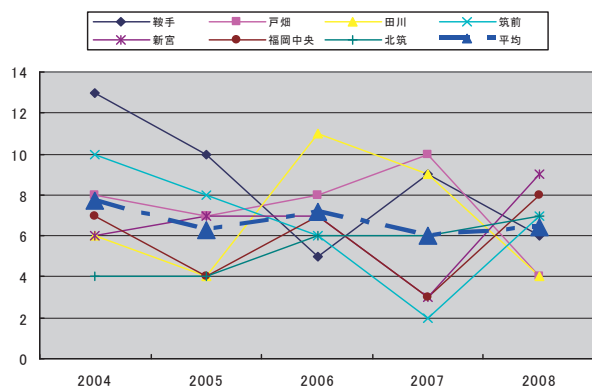


平均を見ると、九州大学合格者数がやや低下する一方で、難関大学合格者割合はやや上昇している。難関大学への進学傾向がやや強くなっているため、と推測される。

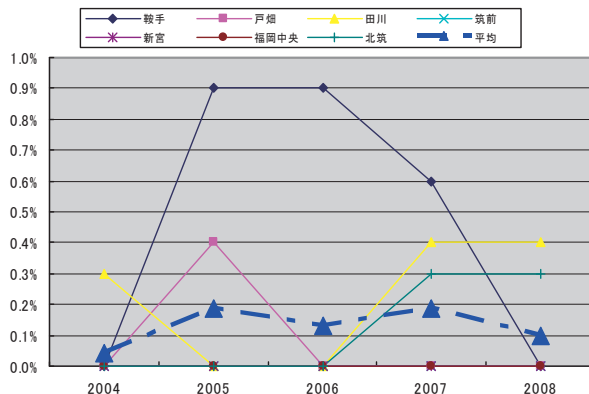
高校ごとに見ると、特に、春日、香住ヶ丘は、九州大学合格者数に比較して難関大学合格者割合が低い「九州大学への進学傾向」の強い高校といえるが、香住ヶ丘は、次第に難関大学への進学傾向が強くなりつつある。

④第4グループ

(イ) 福岡・第4グループの九州大学合格者数の推移



(ロ) 福岡・第4グループの難関大学合格者割合の推移



平均を見ると、九州大学合格者数がやや低下する一方で、難関大学合格者割合はやや上昇している。難関大学への進学傾向がやや強くなっているため、と推測される。

高校ごとに見ると、上記の傾向は、鞍手、田川で強く見られる。

⑤福岡県全体のまとめ

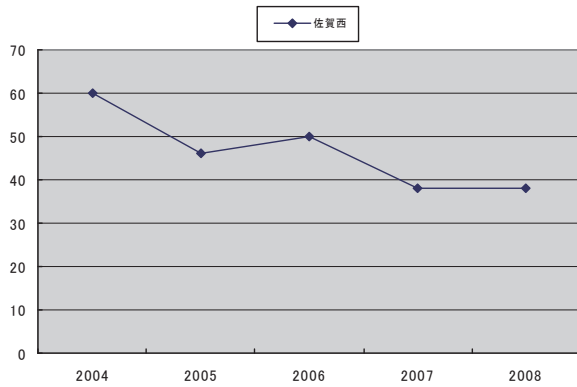
九州大学への福岡県所在高校からの入学者は、人数は分析対象県中で最も多いものの、九州大学合格者全体に占める割合は減少傾向にある(表1参照)。また、高校ごとに違いはあるが、平均を見ると、九州大学合格者数が低下する一方で、難関大学合格者割合は上昇している。

(2) 佐賀

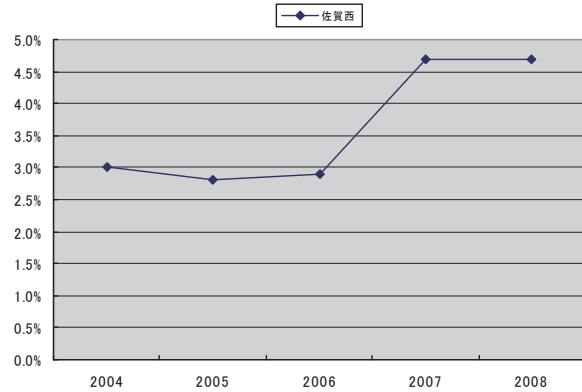
①第1グループについては、該当する高校はない。

②第2グループ

(イ) 佐賀・第2グループの九州大学合格者数の推移



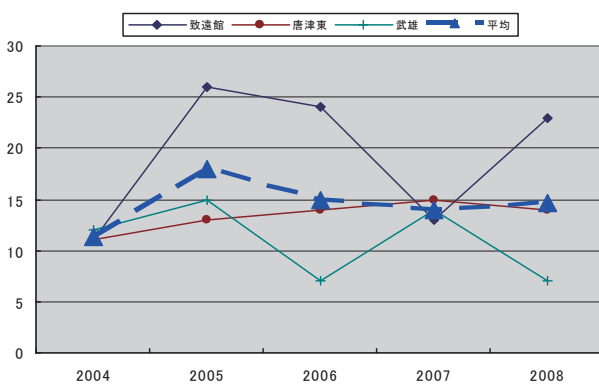
(ロ) 佐賀・第2グループの難関大学合格者割合の推移



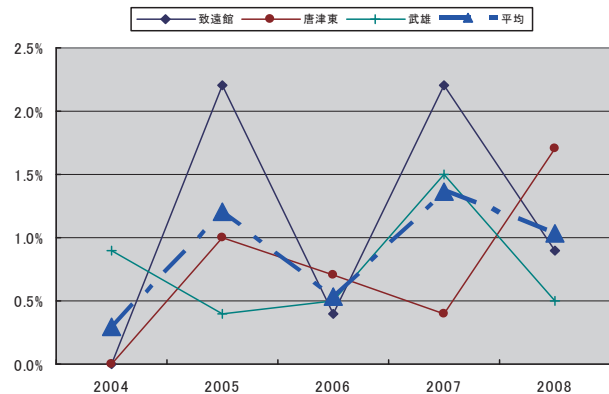
第2グループに該当する佐賀西は、九州大学合格者数が低下する一方で、難関大学合格者割合は大きく上昇している。難関大学への進学傾向が非常に強いことが推測される。

③第3グループ

(イ) 佐賀・第3グループの九州大学合格者数の推移



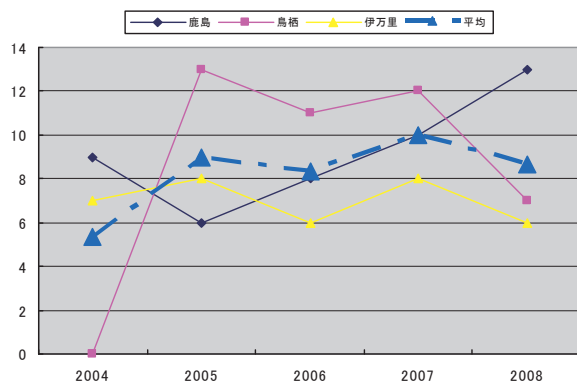
(ロ) 佐賀・第3グループの難関大学合格者割合の推移



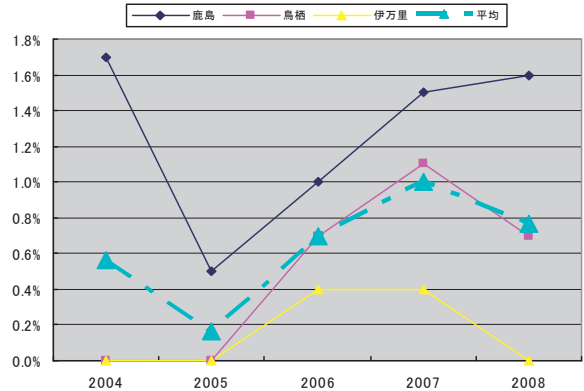
平均を見ると、九州大学合格者数・難関大学合格者割合とも上昇傾向にあり、九州大学及び難関大学の合格者が同程度増加している。特に難関大学への進学傾向が強いとはいえない。

④第4グループ

(イ) 佐賀・第4グループの九州大学合格者数の推移



(ロ) 佐賀・第4グループの難関大学合格者割合の推移



平均を見ると、九州大学合格者数・難関大学合格者割合とも上昇傾向にある。第3グループと同様、特に難関大学への進学傾向が強いとはいえない。

⑤佐賀県全体のまとめ

九州大学への佐賀県所在高校からの入学者は、減少傾向にある（表1参照）。しかし、全体として、九州大学合格者数、難関大学合格者割合とも上昇している。福岡から比較的近いいためか、特に難関大学への進学傾向が強いとはいえない。

ただし、佐賀県内で最上位校の佐賀西においては、強い難関大学への進学傾向が見られる。

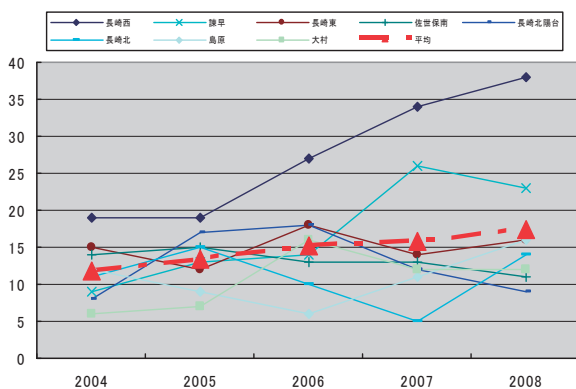
(3) 長崎県

①第1グループに該当する高校はない。

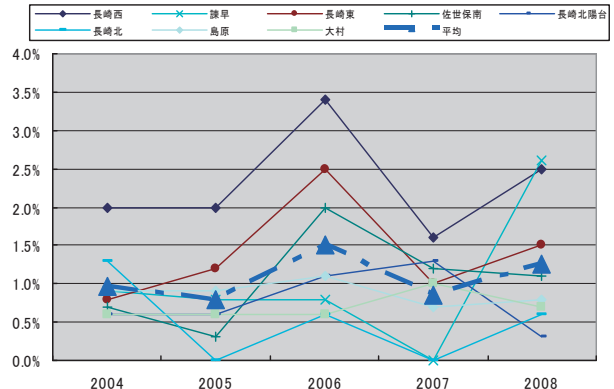
②第2グループに該当する高校はない。

③第3グループ

(イ) 長崎・第3グループの九州大学合格者数の推移



(ロ) 長崎・第3グループの難関大学合格者割合の推移

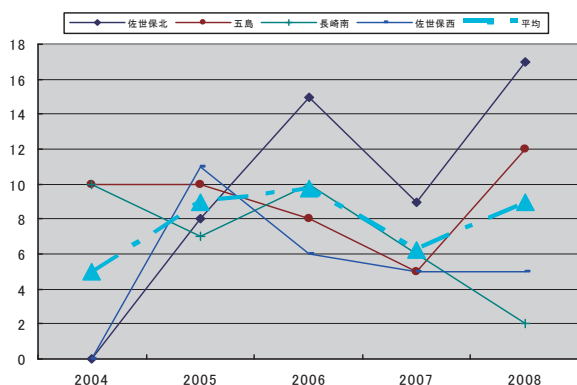


平均を見ると、九州大学合格者数・難関大学合格者割合ともやや上昇している。特に難関大学への進学傾向は強いとはいえない。

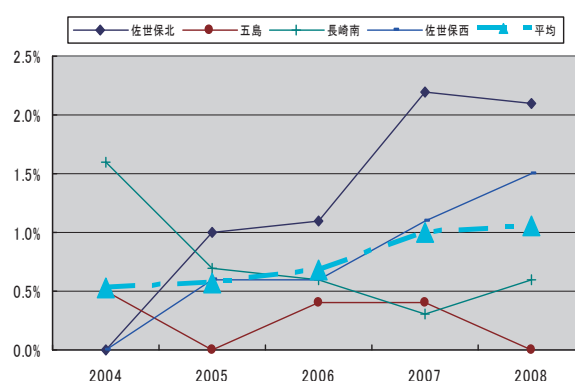
高校ごとに見ると、ほとんど横ばい傾向である。長崎県内の最上位校である長崎西も、九州大学合格者数の増加が著しいが、難関大学合格者割合の上昇はそれほどでもなく、難関大学への進学志向が強いとはいえない。

④第4グループ

(イ) 長崎・第4グループの九州大学合格者数の推移



(ロ) 長崎・第4グループの難関大学合格者割合の推移



平均を見ると、九州大学合格者数・難関大学合格者割合ともやや上昇している。特に難関大学への進学傾向は強いとはいえない。

高校ごとに見ると、佐世保北が、平均と同様に、九州大学合格者数・難関大学合格者割合とも上昇傾向に対して、佐世保西は、前者低下、後者上昇傾向であり、難関大学への進学傾向の強まりが推測される。

⑤長崎県全体のまとめ

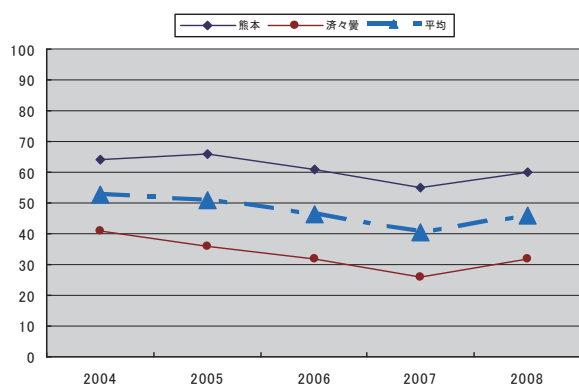
九州大学への長崎県所在高校からの入学者は、増加傾向にある（表1参照）。また、全体として、特に難関大学への進学傾向は強いとはいえない。福岡から比較的近いためか、九州大学への進学傾向が弱まっている傾向は見られない。この傾向は、最上位校の長崎西も同様であり、この点で、隣県の佐賀県の最上位校の佐賀西とは異なっている。

(4) 熊本県

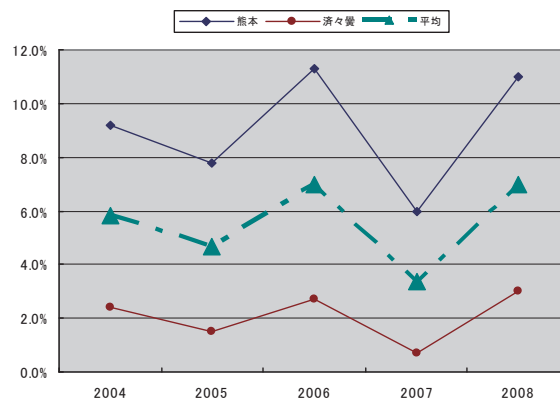
①第1グループに該当する高校はない。

②第2グループ

(イ) 熊本・第2グループの九州大学合格者数の推移



(ロ) 熊本・第2グループの難関大学合格者割合の推移

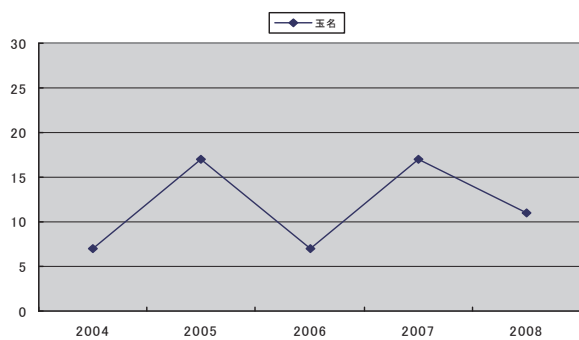


平均を見ると、九州大学合格者数が低下する一方で、難関大学合格者割合はやや上昇傾向にある。難関大学への進学傾向が強くなりつつあると推測される。

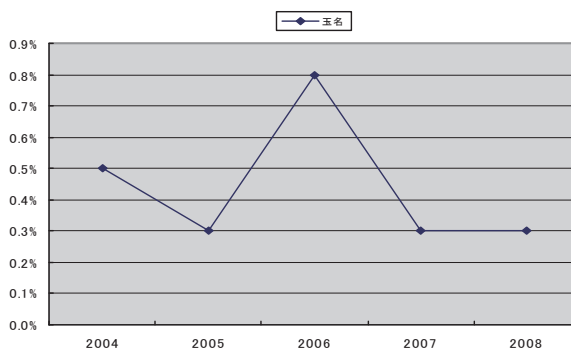
高校ごとに見ると、進学傾向は、難関大学への進学傾向の強い熊本と、そうでない済々黌に大きく分かれている。

③第3グループ

(イ) 熊本・第3グループの九州大学合格者数の推移



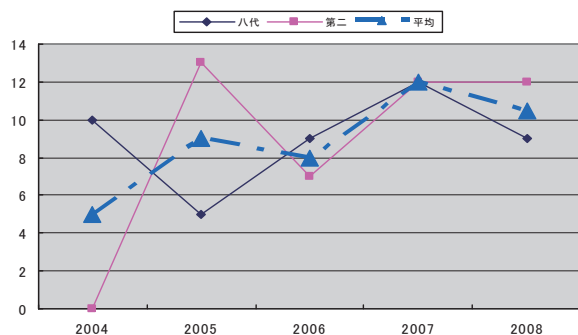
(ロ) 熊本・第3グループの難関大学合格者割合の推移



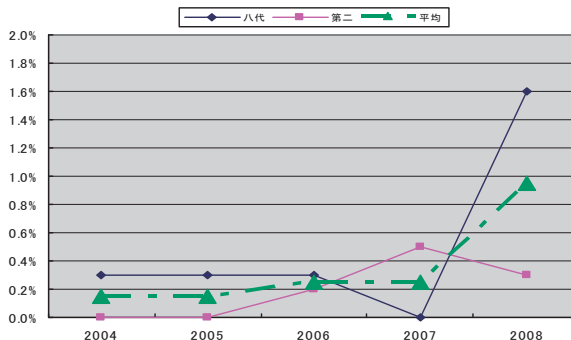
九州大学合格者数は若干上昇傾向にあるが、難関大学合格者割合は横ばいである。特に難関大学への進学傾向は強いとはいえない。

④第4グループ

(イ) 熊本・第4グループの九州大学合格者数の推移



(ロ) 熊本・第4グループの難関大学合格者割合の推移



平均を見ると、九州大学合格者数・難関大学合格者割合とも上昇傾向にある。特に難関大学への進学傾向は強いとはいえない。

⑤熊本県全体のまとめ

九州大学への熊本県所在高校からの入学者は、増加傾向にある（表1参照）。また、全体として、特に難関大学への進学傾向は強いとはいえない。福岡から比較的近いためか、九州大学への進学傾向が弱まっている傾向は見られない。

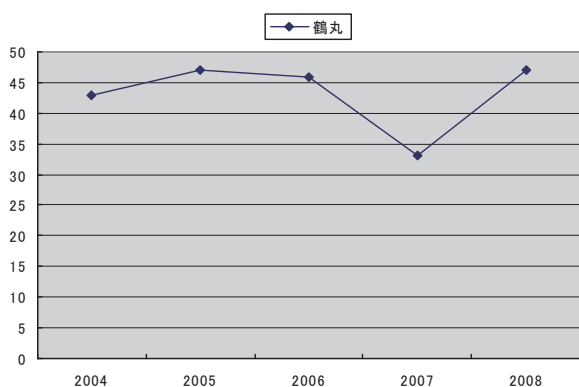
ただし、最上位校の熊本は、難関大学合格者割合が10%超という非常に強い難関大学への進学傾向を示している。この点で、隣県の佐賀県の最上位校の佐賀西と同様である。

(5) 鹿児島県

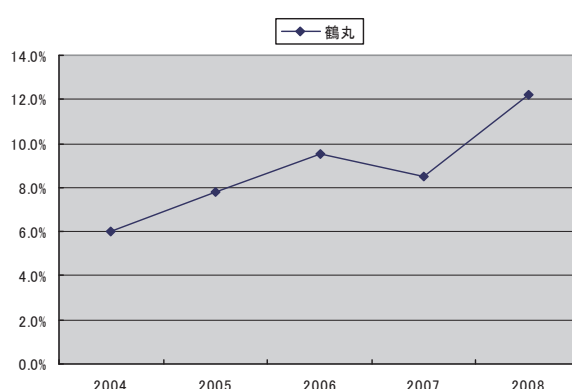
①第1グループに該当する高校はない。

②第2グループ

(イ) 鹿児島・第2グループの九州大学合格者数の推移



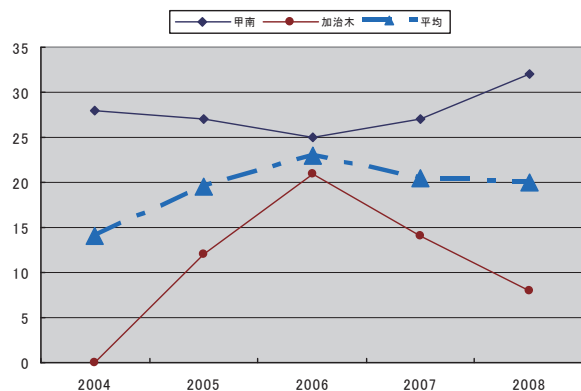
(ロ) 鹿児島・第2グループの難関大学合格者割合の推移



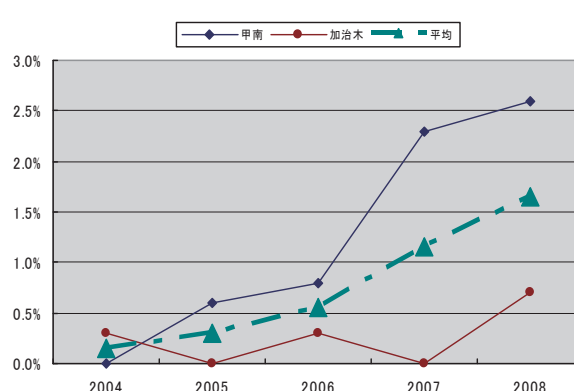
鶴丸については、九州大学合格者数はやや減少、難関大学合格者割合は上昇している。難関大学への進学傾向が強くなっている、と推測される。

③第3グループ

(イ) 鹿児島・第3グループの九州大学合格者数の推移



(ロ) 鹿児島・第3グループの難関大学合格者割合の推移

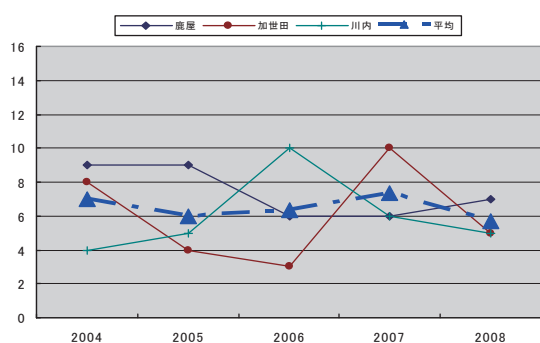


平均を見ると、九州大学合格者数・難関大学合格者割合とも上昇している。特に、難関大学合格者割合の上昇が大きく、九州大学合格者数の増加とともに、難関大学への進学傾向が強くなっている、と推測される。

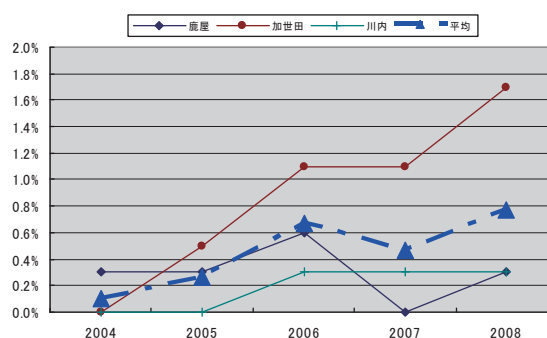
高校ごとに見ると、特に、難関大学合格者割合について、加治木は低い割合で横ばいなのに対して、甲南は上昇が著しい。難関大学への進学傾向が強くなっている、と推測される。

④第4グループ

(イ) 鹿児島・第4グループの九州大学合格者数の推移



(ロ) 鹿児島・第4グループの難関大学合格者割合の推移



平均を見ると、九州大学合格者数は横ばいにも関わらず、難関大学合格者割合は増加している(特に、加世田)。難関大学への進学傾向が強くなっている、と推測される。

⑤鹿児島県全体のまとめ

九州大学への鹿児島県所在高校からの入学者は、減少傾向にある(表1参照)。さらに、すべてのグループで、難関大学への進学傾向が強くなっている。このことから、他県では最上位層の高校に限られている難関大学への進学傾向の強まりが、鹿児島県では、上位グループから下位グループまで広く生じているといえる。

(6) 県ごとの傾向の全体のまとめ

県ごとに傾向は異なっており、福岡・鹿児島では、九州大学合格者数がやや減少する一方で、難関大学合格者割合が上昇しており、難関大学への進学傾向が強くなっているといえる。この傾向は、特に鹿児島県で大きい。福岡から距離的には遠いことで、かえって、高校生の目が全国へ広がっているためであろうか。また、地元であり、最大の「顧客」である福岡県でも、根強い地元志向の高校はあるが、全体的に難関大学への進学傾向が強まっていることに留意すべきである。

他方で、佐賀・長崎・熊本では、九州大学合格者数、難関大学合格者割合とも上昇しており、特に、難関大学への進学傾向が強くなっている、とはいえない。これらの県は福岡に比較的近いためであろうか。ただし、長崎以外の県の最上位の高校には、強い難関大学への進学傾向が見られる。

5. その他の観点からの分析

(1) 公立高校・私立校別の観点からの分析

①公立高校について

九州大学合格者の総数（10,360人）のうち、公立高校出身者（8,282人）の割合は79.9%に達しており、一般に、公立高校は、九州大学への進学傾向が高いといえる。また、九州大学合格者数の多い高校は、難関大学合格者割合も高い傾向があるが、個別の高校によって傾向は異なる。

例えば、難関大学合格者割合の平均値の最上位は、第1グループではなく、第2グループの高校（熊本、鶴丸）である。また、第3グループにも関わらず、第2グループの難関大学合格者割合の平均と同程度の高校（下関西、山口、宮崎西、長崎西等）もある。これらの高校は、成績の最上位の学生が九州大学に進学していない、言い換えるなら、「九州大学への進学傾向」が弱い高校といえる。

他方で、九州大学合格者数に比較して、難関大学合格者割合が低い高校も存在する。例えば、城南、宗像、香住ヶ丘、春日等は、第2グループ・第3グループ上位にも関わらず、平均難関大学合格者割合では1%以下である。これらの公立高校は、いずれも福岡県内であり、地元志向、「九州大学への進学傾向」が強い高校といえる。

②私立高校について

私立高校の九州大学合格者数の総数は、2,078人で合格者総数の20.1%であり、公立高校約4分の1にとどまる。分析対象とした公立高校99校の総卒業生数が約27,000人、私立高校41校の総卒業生数が約13,000人であって公立高校の約2分の1であることを踏まえると、一般に、公立高校と比較して、私立高校の「九州大学への進学傾向」は弱い、といえる。

特に、平均難関大学合格者割合の最上位を占める私立高校（久留米大学付属、ラ・サール等）は、九州大学合格者数では第3、4グループに該当しており、難関大学への進学傾向が非常に強い。

他方で、九州大学合格者数に比較して、平均難関大学合格者割合が低い私立高校も存在する。例えば、福岡大付属大濠、筑紫女学園は、第2グループ・第3グループ上位にも関わらず、平均難関大学合格者割合が1%以下である。これらの私立高校は、いずれも福岡県内であり、私立高校であっても、地元志向、「九州大学への進学傾向」が強い高校といえる。

③まとめ

高校ごとに傾向は異なるが、全体的には、公立が私立よりも「九州大学への進学傾向」が強い。

また、公立・私立とも、福岡県内の高校に限っては、上位グループに「九州大学への進学傾向」が強い高校が数校存在するが、福岡以外の各県の高校では、上位校にこのような傾向は見られない。

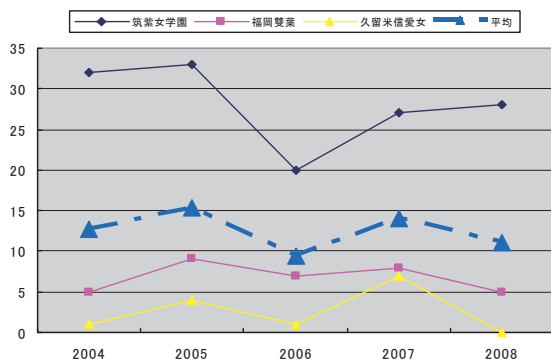
(2) 女子学生の動向に関する分析

女子学生の進学率は増加傾向にあるため、その傾向を把握することは、今後の「入口」を検討する上で重要である。しかし、本稿が用いたデータには、男女別のデータが存在しないため、便宜的に、女子校の動向を分析する。具体的には、筑紫女学院（第3グループ）・福岡雙葉（第4グループ）、久留米信愛女学院（第5グループ）であり、いずれも福岡県内の私立高校である。

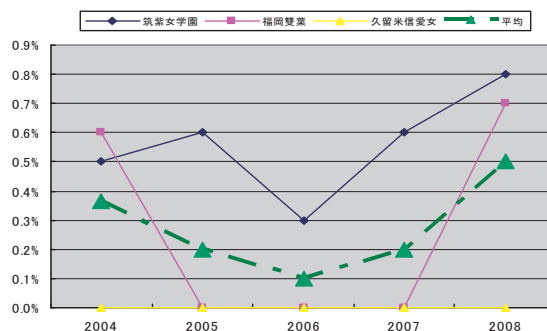
平均を見ると、九州大学合格者数は若干の低下傾向、難関大学合格者割合は上昇傾向にある（特

に、第3グループの筑紫女学院は、上昇傾向にある。)のデータからは、これらの高校は、女子校という性格や、福岡県内の地元志向の影響もあり、これまで難関大学合格者割合は比較的低い水準にあったが、今後、この傾向が変化していく可能性が指摘できる。

(イ) 女子校における九州大学合格者数の推移



(ロ) 女子校における難関大学合格者割合の推移



6. 全体のまとめ

(1) 全体的な傾向

九州大学合格者数については、上位グループでは減少している場合が多く、これらの高校では、難関大学への進学傾向が強まっていると推測される。他方、下位グループでは増加している場合が多い。

他方、難関大学合格者割合については、ほとんどのグループで上昇している。上位グループでは、難関大学への進学傾向が強まっている。他方、下位グループでも、難関大学合格者割合が上昇している例が多い。

(2) 原因について

このような状況の原因は明確ではないが、以下が推測できよう。

①18才人口の減少

まず、全国的な18才人口の減少の影響により、大学入試の難易度が全体的に低下した結果、ある意味、当然の結果であるが、これまで合格実績がなかった高校からも難関校へ進学することが可能になったことが考えられる。

なお、国立社会保障・人口問題研究所の推計によると、九州・沖縄地域及び山口県は、今後10年の若年人口（0～19才）の減少率が全国的に比較的低い地域ではあるものの、人口規模自体が全体でも300万人弱であり、首都圏・関西圏等と比較してかなり規模が小さいため、影響は大きい。

②九州地域の地盤沈下

また、経済・文化的資源の首都圏等への集中により、学生が九州地域に感じる魅力が低下したことが考えられる。

③経済の動向

さらに、過去数年の好景気に伴う経済的な余裕により、九州地域外への進学が可能となった

ことが考えられる。もちろん、昨年来の経済危機に伴い、一時的に地元志向、「九州大学への進学傾向」が強くなる可能性もあるが、他方で、②の影響もあり、今後の予測は難しい。

(3) 課題について

仮に今後10年間にわたって過去5年間の傾向が続くとすると、10年後には、現在よりもさらに多くの成績上位層の学生が難関大学に進学する計算となる（例えば、第1グループでは1校当たり10名、第2グループでは14名が増加する。）。

さらに、現在、首都圏・関西圏において有力私大を中心に盛んに行われている学生の囲い込みの動きが、今後九州にも波及することが予想される（例えば、佐賀県唐津市に早稲田大学の系列校が設置されている。）。この結果、さらに多数の成績上位層の学生が、他の有力大学に入学する可能性もある。

このような状況を考えると、「教育の質」の確保を図る観点からは、かなり厳しい状況に置かれると予想される。

(4) 対策に関する若干の提言

「教育の質」の確保に向けた取組は、全学体制で対策を検討する必要がある。具体的な対策については、本稿で検討する余裕はないが、「入口」対策の検討の際に、参考となるデータがある。すなわち、ベネッセが2004年に実施した学生満足度調査では、九州大学の学生（2～4年生）へのアンケート結果において、「進学に際して参考にした情報」に関して、他の旧帝大と比較して、「家族の薦め」、「高校の先生の薦め」の割合が高い、という結果が出ている。このデータを踏まえると、高校との連携が一定の効果が期待できると推測される。

他方で、この点について、朝日新聞社『大学ランキング』に気になるデータがある。「高校の評価」に関するランキングであるが、近年、九州大学は必ずしも良い状況にはない。すなわち、全国的な順位は低下傾向にあり、また、有力9国立大学（ここでは、旧7帝大学及び一橋・東工大とする。）の中でも低い順位にある（表11）

(表11) 「高校の評価」のランキング（朝日新聞社『大学ランキング』より作成）

年度	総合順位			勤める		
	全国順位	9大学中順位	九州・沖縄地域中順位	全国順位	9大学中順位	九州・沖縄地域中順位
2003	12	7	1	14	9	1
2004	10	6	1	11	7	1
2005	13	6	1	15	8	1
2006	12	6	1	12	6	1
2007	13	6	1	12	6	1
2008	19	9	1	15	9	1
2009	22	8	1	17	7	1

また、九州・沖縄地域では、順位では一位を堅持しているものの、2位以下の大学の評価指数が上昇しているのに対して、相対的に評価が低下している状況にあるといえよう（表12）。

（表12）九州地域における「高校からの評価」のランキング（朝日新聞社『大学ランキング』より作成）

年度	1位	2位	3位	4位	5位
2003	九州大 (30.36)	九州工業大 (8.87)	熊本大 (7.29)	西南学院大 (6.52)	第一薬科大 (5.71)
2004	九州大 (30.57)	熊本大 (11.39)	立命館アジア太 平洋大 (9.08)	九州工業大 (7.74)	福岡大 (7.64)
2005	九州大 (27.04)	立命館アジア太 平洋大 (11.54)	第一薬科大 (10.88)	熊本大 (8.89)	鹿児島大 (7.51)
2006	九州大 (34.73)	熊本大 (14.74)	立命館アジア太 平洋大 (13.01)	九州工業大 (8.26)	第一薬科大 (6.48)
2007	九州大 (31.34)	立命館アジア太 平洋大 (11.84)	崇城大 (10.89)	九州工業大 (9.72)	長崎大 (8.55)
2008	九州大 (16.72)	立命館アジア太 平洋大 (8.12)	九州工業大 (8.08)	崇城大 (5.55)	長崎大 (4.1)
2009	九州大 (16)	立命館アジア太 平洋大 (13.08)	九州工業大 (12.76)	崇城大 (5.03)	佐賀大 (4.67)

注：（ ）内は評価指数。

今後の対策に当たっては、このようなデータを踏まえて、高校からの評価が低下した原因を明らかにし、対策を検討する必要がある。また、その際には、質的な充実、すなわち、高校のニーズや意見を把握した上で、高校に自校の高校生に安心して「薦められる」と思われることを目指した対策を検討するべきであろう。

以上、データ上の限界もあり、また、雑ばくな内容となったが、本稿が、教育の質の確保に関する検討の一助となれば幸いである。

（参考文献）

- ・中央教育審議会大学分科会 制度・教育部会「学士課程教育の構築に向けて（審議のまとめ）」（平成20年3月25日）
- ・朝日新聞社『大学ランキング』（2003年版～2009年版）
- ・毎日新聞社「サンデー毎日」2004年6月12日増刊83巻31号
- ・毎日新聞社「サンデー毎日」2005年6月18日特別増刊84巻29号
- ・毎日新聞社「サンデー毎日」2006年6月17日85巻25号特別増刊
- ・毎日新聞社「サンデー毎日」2007年6月16日特別増刊86巻24号
- ・毎日新聞社「サンデー毎日」2008年6月14日増刊87巻23号
- ・ベネッセ教育研究開発センター『学生満足度と大学教育の問題点2004年度版』